

栗原の稲作通信

令和8年 第1号 令和8年4月2日発行

宮城県栗原農業改良普及センター
宮城県米づくり推進栗原地方本部
電話番号 0228-22-9404

令和8年産稲作の重点取組事項

令和7年産は生育期間を通して高温で経過しました。令和8年産も同様に高温が予想されることから（令和8年3月24日発表、気象庁、3か月予報より）、高温対策も含め、品質向上のために以下の項目に留意して作業を行いましょよう。

1. 土づくりによる地力の向上
2. 健苗の育成
3. 生育量確保、品質向上のための肥培管理の徹底

1. 土づくりによる地力向上

土づくりによる地力の維持向上は、登熟期間の水稻の活力が持続し、品質低下の防止に繋がります。地域の土壌の特徴や有機質資源の確保状況に応じて、堆肥や土づくり肥料の施用、排水改良、深耕を組み合わせる継続的に実践しましょう。

堆肥などの施用

- 完熟堆肥の連用は、稲わらすき込みや堆肥無施用で化学肥料のみの場合よりも、白未熟粒の発生抑制に効果があります（図1）。
- 堆肥の種類により、無機態窒素の放出量や放出パターンが異なります。有機質肥料として1年目から窒素放出の効果を期待する場合は鶏ふん堆肥や汚泥肥料を、土づくり効果を期待する場合は牛ふん堆肥を施用します。
- 作付け直前の稲わらすき込みや未熟堆肥の施用は、イネの窒素不足やガス発生の要因となり生育抑制となる可能性があるため、施用時期に注意しましょう。

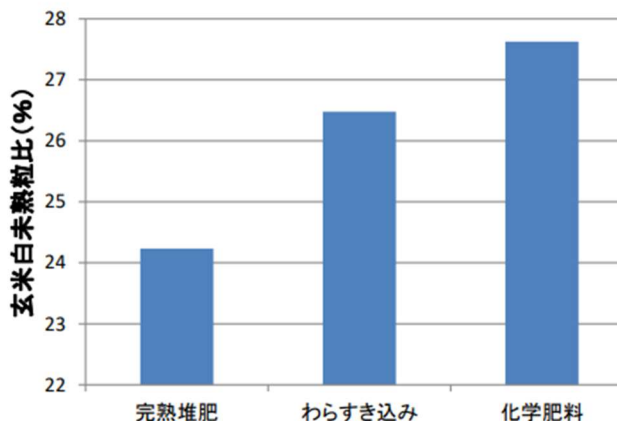


図1 有機物の連用施用と玄米白未熟粒比の関係

注) 平成22年(高温年)古試「ひとめぼれ」
有機物9年連用ほ場

- 基肥に鶏ふん堆肥と有機入り一発肥料を施用することで、環境保全米の施肥条件である化成肥料由来の窒素成分 3.5kg/10a 以下に適用しつつ、慣行栽培（化学肥料による基肥＋追肥）と同等の玄米収量・品質を確保することが可能となります（図2）。

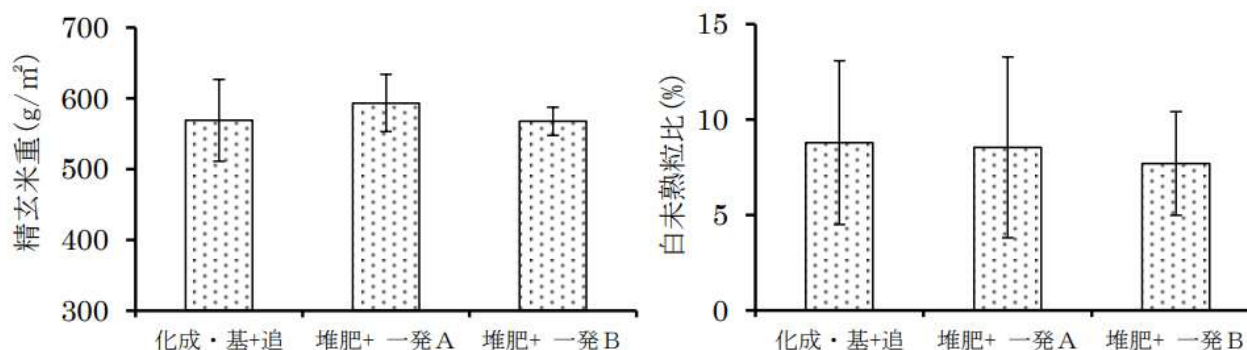


図2 鶏ふん堆肥と有機入り一発型肥料を基肥に使用した施肥体系の精玄米収量（左図）と白未熟粒比（右図）

注）平成 26～28 年古試「ひとめぼれ」、有機入り一発 A「LPS80」、有機入り一発 B「セラコート P70」

注）総施肥窒素量が 6.8kg/10a、鶏ふん堆肥由来で 2.7kg/10a（現物 121 kg）、有機入り一発肥料由来で 4.1kg/10a（内化成肥料由来 2.0kg/10a）をほ場施用（普及に移す技術第 92 号）

2. 健苗の育成

ア 育苗計画

- 近年は育苗期間が高温で経過するため、苗の生育は早まる傾向にあります。田植え時期から逆算して、播種時期を決めましょう。

表1 苗の種類別目標値

項目	稚苗	中苗
育苗日数(日)	20～25	30～35
草丈(cm)	10～15	13～18
葉数(葉)	2.1～2.5	3.5～4.0

イ 塩水選を行い、種子消毒を実施する

- 比重選を実施し、充実した種子を確保しましょう。比重選後は必ず水洗いし、塩分を除去しましょう。

表2 比重選の目安

種類	比重	水 10ℓ に対する食塩必要量(kg)
うるち品種	1.13	2.1
もち品種	1.08	1.2

ウ 浸種時の留意点

- 浸種水温が低い場合（5℃程度）は、高い場合（12℃程度）に比べて発芽揃いが低下することが報告されています（2022 新潟県 金井ら）。浸種は積算水温（ひとめぼれ）で 120℃を目安とし、水温が 10℃で 12 日間、15℃で 8 日間程度となります。また、種子が酸素不足とならないよう、2～3 日ごとに水の交換を行いましょう。

エ 徒長させない対策

- 令和6年作では、育苗期間が高温となったことから、徒長苗となり活着に影響しました。健苗育成のポイントを確認し、健苗移植により初期成育を確保しましょう
- 土壌の水分が過剰になってしまうと根が伸長せず、養分が茎や葉に送られて徒長の原因となります。
- かん水は朝に行い、夕方は乾いている場所に必要最小限にしましょう。
- プール育苗は苗が徒長しやすくなります。入水後は夜間もハウスのサイドビニールを開放状態にしましょう。

表3 育苗管理のポイント

	稚苗（葉数 2.1～2.5 枚）		中苗（葉数 3.5～4.0 枚）
	加温出芽	無加温出芽	無加温出芽
出芽	<ul style="list-style-type: none"> 細菌病や苗立枯れ予防のため、育苗機の温度は <u>30℃</u> を超えないようにする。 芽長は覆土の上 1cm 程度に揃える。 	<ul style="list-style-type: none"> ハウス内温度は、出芽まで昼 25℃前後/夜 10℃、出芽後は昼 20～25℃/夜 10℃とする。 半遮光性の保温シート・フィルム（シルバーポリトウ等）を箱全面にべた張りし、周囲はすきまが開かないように押さえる。 第2葉抽出始め頃に除覆する。 	
緑化	<ul style="list-style-type: none"> ハウス内の温度は昼 25℃/夜 10℃とし、10℃以下になる場合は保温する。 床土は十分に湿っているので、基本的にはかん水しない。 ラブシート等を2～3日べたがけする。 		
硬化	<ul style="list-style-type: none"> ハウス内の温度は、昼間は25℃以上とにならないようにし、夜間は10℃以下にならないようにする。 かん水1回目は緑化終了後とする。 追肥は葉色が淡く1.5葉期頃に窒素成分1g/箱を施用する。 田植え5～7日前頃から、低温時を除きハウスを開放し、外気に慣らす。 	<ul style="list-style-type: none"> ハウス内の温度は、昼間は25℃以上とにならないようにし、夜10℃以下とにならないようにする。 3葉期以降、夜間に10℃以下が予想される場合を除き、常時ハウスを開放する。 追肥は葉色が淡く1.5～2.5葉期頃窒素成分1g/箱を施用する。 	

○栗原農業改良普及センターでは、施肥設計のための土壌分析を受け付けます！

1 土壌診断をするメリット

- ①土壌養分の過不足がわかり、**作物の収量・品質が安定します！**
- ②土づくり資材等の適切な投入量がわかることで、**施肥コストを減らすことができる可能性があります！**⇒土壌診断は「**土の健康診断**」です。作ごとの診断をおすすめします。

2 注意点など

- ①施肥設計に活用する場合は原則「**施肥する前**」に土を採取します。
- ②土の採取方法等でわからないことがありましたら、普及センターまでお気軽にご相談下さい。

問い合わせ先：栗原農業改良普及センター 先進技術班 TEL：0228-22-9404